
カテゴライズ

月代奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カテゴライズ

【Zコード】

Z2358BA

【作者名】

月代奏

【あらすじ】

かつこよくて凜々しい彼氏。

その秘密が今、私の前に現れる。

2005年作品

晶の背中を見ていたら、急に抱きつきたくなつた。私より頭一つ大きいし、それに見合つた背中の広さがある。趣味で筋トレなんてことしてゐるから筋肉も程よく付いてるし、力強さを凝縮したような、男の全てが語られていそうな背中に私の体が吸い込まれていく錯覚が生まれる。背中で語るつてこういうことなんだと、最近良く思う。音を立てないように椅子から立ち上がって、ヤカンの口から湯気が沸きあがる瞬間を待つていた晶のお腹に、そつと腕を回した。鍛え上げられた腹筋つて感じがして、服越しのさわり心地も快適だ。

「真希。危ないだろ？」

「ゆっくり触つたから大丈夫だよ〜」

筋肉質の身体に備え付けられた、男の人とは思えない綺麗な顔が私を見下ろしていた。細めの目が晶を知らない人には怖そうに見えるんだろうけど、知つてゐる私から見ればその中にある優しい光に気づく。損をしてるとと思うけど、それで良かつた。

私以外の人には、出来るだけ晶の良さは知られたくないから。

ようやく素敵なおじさんだから。

「もうそろそろ沸いたんぢゃない？」

「あとちょっとだよ。湯気が思い切り沸いてからポットに入れたら、お風呂上りにはちょうど良くなるんだ」

言葉と共にヤカンから吹き上がる煙。

腰に抱きついた状態で見上げた私の目に、晶の嬉しそうな顔が見えた。この顔も、性格も、今まで付き合ってきた男の人には無かつた。毅も徹も哲也も顔は好みだつたけど私を女として扱つてくれなかつたし。最後には酷い振り方されたし。

今度こそ、晶は「恋人」になつてくれると思える。

「んじゃ、俺風呂入つてくるから」

「うん」

定位置に置かれた電気ポットにお湯を入れて、晶は浴室に向かった。これから後にはついに結ばれる。何人の男の人と寝ても、最初の日は絶対緊張してしまつ。行為は同じだけど、人それぞれで何かが違うんだろう。

考えていると緊張してきたから、初めて入った彼の部屋を見回してみた。そして感じた不思議さが、私から緊張を奪つていった。

（うつわ……凄い整頓されてる）

一つある三段だけの小さな本棚には本が整然と並べられていた。大学で使つてゐる参考書とか講義のレジエメ。家庭教師のバイトで使つてゐる問題集が一方の本棚に。そして、漫画や小説がもう一方の本棚に綺麗に整えられている。一つの本棚の中でも大学と家庭教師で使う本は完全に分けられていた。これならすぐに欲しい本を取り出せるに違ひない。

私も本の置く場所は簡単に分けてるけど、読んだ漫画とか勉強に使う本棚に置いちゃつたりするから、この几帳面さは尊敬できる。しかも横幅全て埋まつていてるわけじゃなくて、隙間が開いているとこには本を真つ直ぐ立てるために仕切り板を置いていた。もう少し余裕持つて置いてもいいのに。

そこが目に付くと、整然としてるところが本棚だけじゃないことにもすぐ気づいた。さつき湯を沸かしていたヤカンはキッチンの端に置かれていた。たまたまなのかもしれないけど、口がこっちに真つ直ぐ向けられて置かれている。

本棚の上には飛行機のプラモデルが四機置かれていて、そのどれもが同じ角度で同じ方向に並べられている。機体を支える太目の棒の角度を変えることで機体の角度も変えられるみたいだけど、少し近づいて見たら支える柱の角度は全て同じだった。

「なに、これ……」

呟いた声が震えていた。

折りたたまれて端に置かれている敷布団も、テレビの上に置かれているリモコンも、充電されている携帯も、全て何かのオブジェの

ようにはしつとした形、位置に配置されているように思えてきた。付き合つてから何回も几帳面なところを見てきたけれど……ここまでするのは几帳面を通り越してるんじゃないだろうか？

ブルルルル……

携帯の震動音にはつとして、自分の携帯を取り出した。鳴つてないことを確認して、心臓の鼓動を抑えるように深呼吸する。少しだけ落ち着いて、もう一つの携帯 充電されているそれに近づいた。

『着信・小学校女友達・エリコ』

携帯の液晶に刻まれた文字。

しばらく続いた電話が切れる、意を決して充電器から携帯を抜いた。

メールは見る気が無い。女の子の友達がいることも普通だらう。でも、一つだけ気になつた言葉を確かめたかった。

あの『小学校女友達』とは何だらう？ おそらく携帯内でグループ分けをしてるんだろうけど、その分け方に興味があつた。いや、感じた氣味悪さを確認することで払拭したかった。私の携帯と少し違つたけれど大体の操作は一緒だつたからすぐに電話帳を開いた。そこには名前と電話番号の羅列。一つ名前を押せば、詳しいデータが見られるはずだ。でも個人データなんかに興味は無かつた。

サブメニューボタンを押して、表示切替を選択。

選んだ先にあつた異様な映像に、背中をおぞましさと気持ち悪さが走り抜けた。

一・家族。二・小学校男友達。三・小学校女友達。四・中学校男友達。五・中学校女友達。六・高校男友達……。

全部で一百人近くある携帯情報をグループ分けをほぼ全部使って分けている。

異常なまでにグループ分けされた電話帳。異常、という言葉が頭の中を反復する。

几帳面？ これは…… そんなレベルを超えてる。

晶は物を整然と並べて、人間までこうやつてカテゴリー分けしてる。そう思うと手が震え始めた。もし今覗いてることを知られたら…… どうなるんだろう？

見ていくといくつかまだ未分類が残つていて、最後に書かれていた項目は『恋人』だつた。ここに…… 私が入つてる。晶とは大学で最初、同じ組になつてから友達になつたけれど、今までに見た『大学女友達』や『女親友』とかじゃなくて、恋人。複雑な思いもあつたけど、この項目には私一人しかいないんだと思うと、少しだけ気が晴れた。現金な物だなど自分でも思つけど、やつぱり特別な存在つていうのは嬉しくなる。

確かに異常は異常だけど…… まだ別れるつて思うほどじゃない。もつと酷い男とも付き合つたことあるし…… 時間がたてば慣れたりするかもしれない。何にせよ、こういう部分が無ければ私には最高の彼氏なんだし。

最後にただ一人の『恋人』を覗いて口直しをしてから戻そうと思つて、ボタンを押してみた。

表示されたのは、友達の名前だつた。

(.....)

すぐに『恋人』カテゴリーから出て自分の名前を探す。大学の女友達にもなかつた。見落としたか、他のグループに入れられているのかもと家族から探し始める。いつお風呂から晶があがつてくるか分からぬ焦燥の中で、自分の名前を先に調べればいいことに気づいたのは、人数で百人ほど確かめた時だつた。

「そうだよ…… きつと私は無分類なんだ。だからグループ分けじゃ表示されないんだ」

自然と独り言が出てくる。もう一人の私が私を励ましてくれる。でも、一人とも何となくだけど結末が見えていたんだろう。私が自

分の名前を探し出した時、言葉は、なかつた。

『三井真希・でがらし・電話番号〇九〇××××……』

「でがらし」

一言呴いて、こみ上げてきた笑いを素直に表す。ふふん、と鼻が鳴る。

もう一度グループ分けを表示させて名前のついてない部分を探してみる。一番下に『でがらし』があつた。開いてみると、確かに私の名前。そして、他にも十人ほどの名前が連ねられていた。この人達も、私と同様に捨てられたんだな。でも、私はいつからここに入れられていたんだろう？ そんなことが気になつたけど、どうでもいいことだった。

いつカテゴリー分けされようとも、彼にとつて私は『でがらし』で、もうおいしい成分が染み出した後なんだから。

こうして物を自分の思うままに配置したり、人を徹底的にジャンル分けして、何が楽しいんだろう？ 分かりたくもないし、分かつてもろくな理由じゃないだろう。一つだけ不覚だったのは、でがらしこういう言葉にセンスを感じてしまったことだ。

おいしこうのはもう味わつたから、あとは捨てるだけ。だからでがらし。

……使い終わつたお茶の葉は水虫に効くのに。

こんな絶望的な気分の中で、どうしてこんな変なことが浮かぶのか分からぬ。何か情けなくなつて涙が滲む。でも泣いてなんていられなかつた。怒りに、身を任せん。

携帯電話を持ったまま私は電気ポットを開けた。さつき入れたお湯が冷めないままでもわつと白い煙が出てくる。鼻の奥へと急に蒸気が入り込んで、つんと痛むけれど、手に持つた携帯をお湯の中へと投下した。そのまま何事もなかつたようにポットの蓋を閉める。「でがらしでも十人いるなら、少しさは味あるんじゃない？」

まだお風呂から出ない晶に吐き捨てて、帰り支度をそそぐと整えて部屋を出た。さつと明日、いろいろと言つてくるに違いない。でもその時は最低具合を思い切りぶちまけて、絶交するんだ。それまで憎しみを消さないでおきたい。

ふと思いついて携帯を取り出す。

晶の情報を出して、修正する。

「ふん……」

毅、徹、哲也と一緒に晶の名前が刻まれた。

『安里晶・111・電話番号090xxxxxx……』

本当、カテゴリー分けするなんて最低！

(後書き)

グループ分けは途中でめんびくさくなりますよね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2358ba/>

カテゴライズ

2012年1月5日23時46分発行